



修さん、塩川さん、私など新制高校卒メンバーは、湘南中学 OB チームの若手として大会に参加しました。早川さん、桑田さん、小林さん、小田島さん、など超OBの名選手の方々と共にプレイ出来る楽しい機会でした。この湘南 OB チームを湘南ペガサス O-60 が引継ぎ、刈谷大会、清水大会、JFA 全国シニア大会などに開催初期から参加しました。2002 年の敬老の日には全国ネットで湘南ペガサスの試合振りが紹介されましたが、塩川さんの見事なロングシュートが放映されました。ねんりんピックではサッカーが正式種目となり、塩川さんは神奈川県代表で4回参加しています。我々の年齢に合わすかのようにやがて O-70 の大会が始まり、全国シニア大会、清水大会、刈谷大会、福井大会、掛川大会、那須大会、熊谷大会、深谷大会等、多くの大会が塩川さんの活躍の場所となりました。そしてやがて始まる O-80 大会にも参加されています。

塩川さんは SOI (旧制高校 OB のチーム) の海外遠征では、ワシントン、スエーデン、タスマニア、ウイリントン、シアトル等を訪れて各地の方々と交流を重ねておられました。湘南ペガサスのワールドコースト海外遠征にも参加されました。試合の合間の観光としてホエールウォッチングで搭乗した小型飛行機では、かつてのジェット機名パイロット塩川さんが操縦席に乗り移り、我々の命を預けたこともありました。

シニアサッカーの目的は、楽しみながら生涯現役を目指すことですが、塩川さんは、海外を含めての遠征参加や練習会への継続的な参加で、90 歳プレイヤーとしてこのことを成し遂げられました。今後も我々シニアプレイヤーの目標として長くグラウンドに立って戴きたいと思います。

書評：ガンさんの箱 植松二郎先輩のサッカー小説『岩箱』

48 回生 細川 周平

1970 年代まで湘南高校サッカー部員だったなら、顧問兼総監督だった岩渕二郎、通称ガンさんをよく覚えているだろう。私たちのセンパイにあたる植松二郎さんの『岩箱』はそのガンさんをめぐるモデル小説で、もう一人の教育大出身の実戦派監督や、教育大 (筑波大) 付属戦、対組のような卒業生なら思い出される催しや、校舎エリアよりも低い場所に広がる校庭を背景に散りばめ、元部員には思い出されることがいろいろ多い。高校サッカーのほか、この種目の日本や世界の歴史・趨勢にあちこちで深入りし、主人公のサッカー人としての顔を大きく描いている。サッカー小説と呼んでもかまわない。めったにないことだ。

ガンさんは大正末、創立まもない旧制湘南中学在学中、イギリス流紳士づくりのための新奇なスポーツとして珍しく採用されたア式蹴球 (アソシエーション式フットボール) を覚えた。つまり日本サッカー草創期を生き延びている。大柄で運動神経が良く頭角を現わし、卒業後も先輩として指導にあたった。出征復員後、1946 年、戦

後最初の国民体育大会 (国体) に湘南中が県代表として参加した際、総監督の立場で優勝に導いた。それから数年、宮城県の農業学校で教員をつとめた後、1950 年代には新制の湘南高校にもどって、英語教員のかたわらサッカー部顧問・総監督となる。小説では母校とこの競技への深い愛着故と解釈される。そして高校のグラウンドがなぜかワールドカップに通じる。1954 年大会のハンガリー優勝チーム、通称マジック・マジヤールの先端的 MM フォーメーションが、神奈川県の一高校で再現されたというのだ。植松二郎はその指導を受けた湘南サッカー部関東大会優勝チーム (1966 年) のレギュラーで、部史のなかで語り継がれるヒーローである。

物語はガンさんの箱入りの遺品 (だから岩箱と呼ぶ) を没後約半世紀、作者である「私」が同学年の元部員から受け取るころから始まる。ボールを蹴る青春を軸に、個性的教師の人生を振り返るのがあらましで、農業学校教員、定時制教師などの経歴が突き止められるのだが、謎に残るのは出征で、岩箱資料は黙ってしまう。ハイライトが坂口安吾への自作探偵小説をめぐる書簡で、自ら探偵物を書く作者の書きぶりはかなり熟っぽい。旧師の思いがけない文学活動は「私」を驚かせる。サッカー教師としての顔しか知らなかったのが、実は昭和の一流雑誌『新青年』に作品を投稿し、作家たらんと目指したが、教師兼サッカー部顧問として後半生を送った。そこまで分かったが、岩箱からは期待された未発表作は発見されない。謎の筆名を解き明かすと意外な事実が……。

恩師の思い出+半生掘り起こしというありがちな話に終わらず、学外 (グラウンド外) に思わぬ世界が広がっていたことに調査は向かう。ちょうど「私」はガンさんの享年に達し、ただ懐かしい、昔はよかったに留まらない感慨に襲われながら、岩箱の底をさらう。周囲には衰えたり亡くなる者が珍しくなく、老いに共感している。箱から順にお宝が出て新発見につながるというより、遺品をきっかけに自分たちの知るガンさんを思い出し、知らないガンさんを想像するところに主眼が置かれている。半世紀前ともに MM フォーメーションで走った仲間が順に老いていく。遺品はこのあまりに月並みな真理を思い返す触媒となる。ほんの一部しか知らなかったサッカー先生の人生を断片から像に仕上げつつ、自分たちの人生を振り返っている。何度も年表を作ろうとするが完成しない。時代を行きつ戻りつ、逸話のなかに入ったり外に出たりの語り口は巧みで、推理小説に似てなくもない。パズルを組むような書きぶりは作家の本領発揮で、伝記仕立てでは伝わらない共感が込められている。

植松さんの十年ほど後輩、1970 年入学の元部員として、ガンさんのことは忘れられない。いや、これを読むまで彼のことも高校時代も思い出すことはなかった。ふだん忘れていたのに本当は忘れていないというほうが現実的だ。その頃ガンさんが還暦すぎだったと今分かる。放課後指導の中心は本書にも C の名で登場する若い体育教師で、メキシコ五輪銅メダルのプレイを高校チームに取り込んだ。同じ学年には横山、八重樫、釜本にあたる選手はいたのだが、杉山がいなかったため、関東大会へは進めず、県大会のありきたりの戦績で終わった。

選手然としたその体育教師が次の試合目指してコーチしたのに対して、ガンさんは夕暮れ時に突然現われ高校生の相手をした。本書で描かれるほど走り蹴る投げる運動ぶりではなかったにしろ、トーキックで相手の意表を突くパスは鮮烈に



思い出す。監督の上にいる総監督とやらで、練習の後の一言を求められると、本書にもあるように警句を發した。在学中、自宅へ部長がどっと呼ばれ、奥さんとも見知ったはずだが、体育教師のお招きと混同しているかもしれない。ついでだが、今は私がちょうどガンさんの享年となり、本作がいっそう身近に感じられる。もうひとつついでだが、本書は箱入りの凝った装丁で仕上げられている。岩箱にちなんだのかどうか。

名言録のなかでは「球はたま(きんたま)の下で蹴れ」をよく覚えている。「きんたま」と声に発するだけで、当時の男子高校生はタブーに触れたようにキョキキョキ笑ったものだ。女子に聞かせてはならない単語だからだ。本書でも引用されている。ほかにも「精神力だけではフットボールの試合に勝てない」、「だれも衰える」、「理論には秘密がない。戦術のほとんどは秘密」など今もぐっとくる文句もあるそうで、サッカー警句と人生警句が一体になっている。記憶にはないが口ぶりは想像できる。小説はそれをいちいち解釈せず、彼の文章上の好みと性癖を表わすものとして引用する。その延長に安吾好みの賢く口達者な探偵がいるかのような設定だ。するとガンさんの思考回路でサッカーと推理小説は一つなかりだった。これが本作の肝である。

著者:植松二郎 41 回卒。広告制作会社に勤務後、フリーで作家として活動。小説『春陽のベリローラ』で織田作之助賞受賞。

書評:細川周平 48 回卒。国際日本文化研究センター名誉教授。『遠きにありてつくるもの』で読売文学賞受賞。

書籍『岩箱』は亀鳴屋より発売。通販で販売。

<https://kamenakuya.main.jp/book/>

☎ 076-263-5848



ペガサス 70 は基本的に O-70 と O-75 の二つのチームに分かれて活動しています。

毎週火曜日には自由参加の馬入交流会がありますが、この交流会で月に一度「ロイヤルリーグ」が開催され、ここではペガサスの 70 才以上のメンバーが一緒になって湘南ペガサスとして試合をしています。

1. O-70 の活動

ペガサス 70 は、O-70 神奈川リーグ (JFAL)、神奈川シニアサッカーリーグ (KSSL) のリーグ戦と県議長杯トーナメントが主な公式戦となっています。また、対外試合としては、第 22 回栃木 G リーグ (6 月) に参加、第 18 回東日本ロイヤルエイジサッカー大会 (11 月) に参加予定です。

JFAL は、今期 12 チーム 2 回戦総当たりで進められていて全 22 試合です。この原稿を書いている 10 月半ばで前半の 11 試合と後半の 1 試合を消化。成績は 3 勝 7 敗 2 分で現在 12 チーム中 8 位です。残り 10 試合で 5 位以上を目標にしています。

KSSL は、12 チーム 1 回戦総当たりで進められていて全 11 試

合です。現在のところ、2 勝 2 敗 4 分で 12 チーム中 6 位です。残り 3 試合でも順位を上げていこうとメンバー一丸となって奮闘しています。

サッカーの活動報告となるとどうしても試合結果やリーグ戦での順位の話が中心になります。もちろん勝つことを目的にチーム全員が一丸となって試合に臨むのですが、ペガサスサッカークラブ会則には勝敗や成績に関する事が一言も触れられていません。湘南ペガサスサッカークラブ会則の「第 3 条 目的」には、本会は、以下の事を目的とする。

1. サッカーを通じて会員相互の親睦をはかり、心身の健康を増進する。
2. 本会発祥の趣旨に鑑み、神奈川県立湘南高等学校サッカー部の発展に資すること。

とあります。目的は、「会員相互の親睦をはかり、心身の健康を増進する。」「湘南サッカー部の発展に資する。」の 2 点です。私は高校卒業後、大学でも企業でもサッカーを続けてきました。40 代にペガサスサッカークラブに入って約 30 年ペガサスでプレーしていますが、70 才となると体力の衰えを身に染みて感じます。それでも、私がサッカーを続けている理由は、「心身の健康を増進する。」ためと「現役サッカー部を応援する。」ため、さらに、ペガサスサッカークラブの活動を応援して次の世代に継承するためです。先輩が作ってくれた何歳になってもサッカーをすることが出来る場を提供し続けるためです。

これからもこの目的に沿ったクラブ活動を続けていきたいと考えます。

「ペガサスへの勧誘」について:

ここで、今回の OB 会報のテーマ、「ペガサスへの勧誘」について思うところを書いてみます。

ペガサス 70 の現状を見てみますと、「来るものは拒まず、去る者は追わず。」の精神で入会希望者を受け入れていますが、今年度入会した会員は全員、湘南 OB ではありません。そして、彼らの入会希望理由は、ペガサス 70 で楽しむサッカーをしたい、というものです。

ペガサス 70 は毎回試合に 15 人以上集まるのでゲーム人数不足に悩むことはほとんどありませんが、湘南 OB が少ない事が最大の問題です。

私の知る 70 才以上の湘南 OB でペガサスサッカークラブ以外でサッカーを続けている人は、大学や中学の OB チーム、全国大会出場をねらうチーム等、それぞれの目的に合ったチームでサッカーをしていると思います。この人たちをペガサスに勧誘しても入会してもらえそうにありません。現在所属しているチームを離れてペガサスサッカークラブに入った場合、どんなメリットがあるか? ペガサスの魅力をもう一度考え直してみる必要があるように思います。

一方、40 代、50 代のチームではできるだけ多くの湘南 OB に声をかけて勧誘する事を期待します。仕事や家庭で忙しい時期ですが、やる気になればまだまだやっつけていける可能性は高いと思います。

2. O-75、O-80 の活動 (二木修二さん記)

毎週火曜日に開催される交流会では 6 月に今年度 90 歳を迎える 3 人の選手に「寿」の字をあしらった記念ユニフォームが贈呈されました。その内の 1 名は湘南 OB の塩川儒広さんでした。

